

「むのたけじ氏のご逝去」

2016年08月23日

むのたけじ氏が21日、老衰のため101歳の生涯を終え、ご逝去された。むの氏は反戦・平和を訴え続けた反骨のジャーナリストとして知られ、多くの人々の尊敬を集めてきた。東京外国語学校（現・東京外大）を卒業後、報知新聞、朝日新聞の社会部記者として働き、インドネシア上陸作戦に従軍した経験を持っている。アジア・太平洋戦争で大本営発表をそのまま報道した責任を負って、敗戦日に新聞社を退社した。

1948年に故郷の秋田県横手市でタブロイド判2頁の「たいまつ新聞」を創刊し、時事問題を独自の視点で分析、解説、批判し、報じ続けた。1978年に「たいまつ新聞」は780号をもって休刊したが、その後は、執筆や講演活動を行い、市民の側に立つジャーナリズムを貫徹した。殊に最近、秘密保護法や安保関連法などに対し、戦争に向かう政治状況であると激しい反論を展開した。民主主義を実現し、平和を構築するために、自分の生活と言葉を賭けて闘ってきた生涯であった。心から敬服する。

今年の5月3日の憲法記念日、東京臨海広域防災公園で開かれた憲法集会に、車いすで参加し、大声で力強く下記のようなアピールをした。自分の戦争体験から、戦争は相手を殺さなければ、こちらが殺されてしまう。道徳観が壊れた無様な殺し合い、そして物を盗んだり、女性に乱暴したり、証拠を消すために火をつけたりする。これが戦場で戦う兵士の実態である。戦争によって、社会の正義は実現できない。戦後、憲法九条こそが人類に希望をもたらすと受け止めた。70年間、国民の誰も戦死させず、他国民の誰も戦死させなかった。この道は間違っていない。

ルポライターの鎌田慧氏は、むの氏のご逝去を悼み、「東京新聞」に下記のように載せている。「101歳にもかかわらず車いすで参加し、憲法九条、平和の大切さを大きな声で熱心に訴えていた。驚くべき精神力の持ち主だったと思う。…地域で反戦を訴えながら、民主主義を実践していく姿勢を貫いてきたことは大きな意義がある。最後までジャーナリズムのあるべき姿を探ってきた人だった。」

2011年に出版された『希望は絶望のど真ん中に』の下記の言葉に、私は感動した。「絶望と見える対象を嫌ったり恐れたりして目をつぶって、そこを去れば、もう希望とは決して会えない。絶望すべき対象にはしっかりと絶望し、それを克服するために努力をし続けられれば、それが希望に転化してゆくのだ。そうだ、希望は絶望のど真ん中の、そのどん底に実在しているのだ。」むの氏は絶望を知り、体験し、その中から言葉を紡ぎ出している。むの氏の言葉の迫力は、ここから来ている。

2013年に出版された『99歳 一日一言』は、毎日、短い言葉で、書き綴っている。12月1日、「必ず来る死に眼をつぶらない。自分で納得して死のう。そのためとことん生き抜く。」また、色紙に「死ぬ時こそが生涯のてっぺん」と書いている。むの氏は死を見据えて、今を懸命に生きていたのである。そこでは、退廃や自堕落はあり得ない。

『週刊金曜日』は「話の特集」で、むの氏の「たいまつ」を連載していた。自分の病気について、それから克服した事情を率直に書いていた。その最後の「たいまつ 11」は「子どもは人類の根幹」と題して書いている。「相手と本気で付き合いたいなら、おなじ目線が必要です。子どもは一人の人格を持った独立した人間とみて付き合い、導くべきです。…幼い子もまた人類を構成する大事なひとつのかたまりで、それが人類の根幹である。」むの氏の文章は、命を愛おしむ「愛と正義」に貫かれている。